



雲くもとと遊あそ新あたら話しな
初輯上

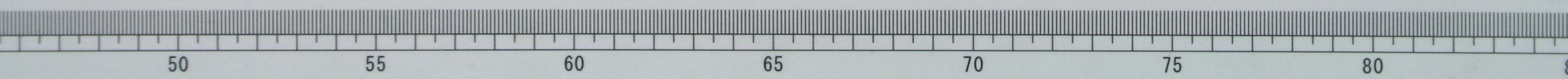
生田芳春画

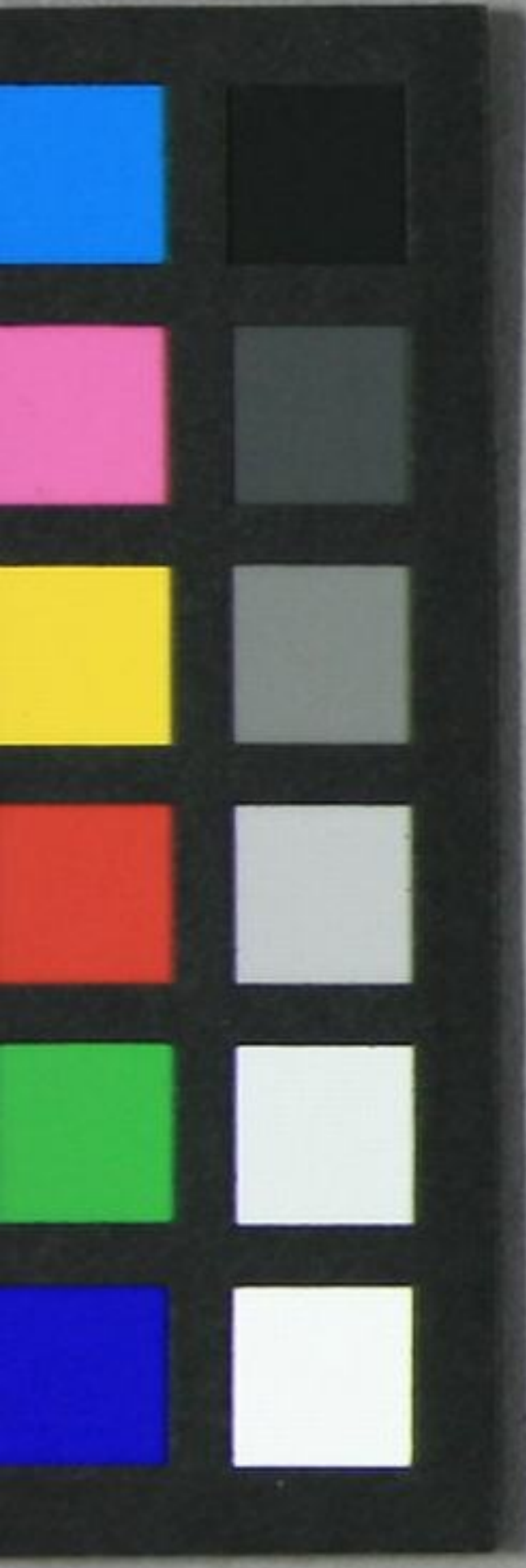
篠田仙果著

中

中

上





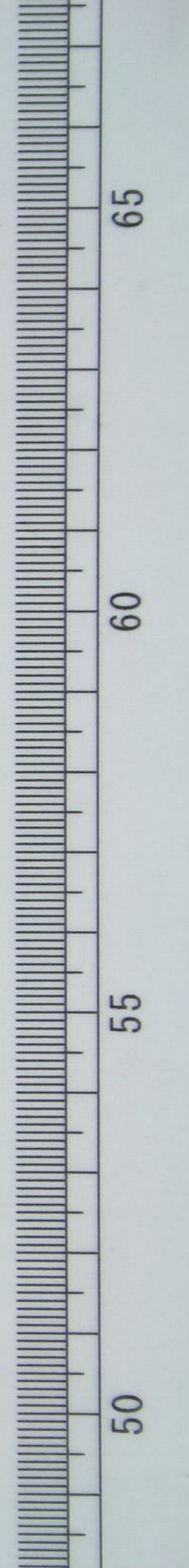
雲月遊新話

初輯上

生田芳春画

篠田仙果著

上



A482

岩水
八景



雪月花 仙果著

三遊 岩水著

新伝 山松堂著
初輯上

雪月花三遊新話初輯

羅漢中八万八の星を走らせ三世手真似て用を達し。紫女百八を發智理割五十四帖の人情本を綴り迷府で地獄の憂目を為しと哉。此を偶言の裨益をを憎みくの慢言あるべし。爰ふ仏國有名の小説ホルリドエライフハ架空の筆も就と雖も。宜勸懲の意を旨と筋立最とも意表ふ出て奇書と呼ぶ。過言ふ有らむ。去ハ福地櫻痴先醒夙ハ開卷拍掌せしを教諭の一助と感銘ありて落語家田朝氏ハ之を口授す。氏も亦翻案工風。本年封切りの新話とせしを亦受次てカ伽草紙とありぬ。

笠亭のあらと
篠田仙果記



48-8142



関運招慶お其名
 を市中お隠せど
 終少輝月お比ま
 相州東浦賀荒井町の
 俠客石井山三郎

不運薄命お
 歲月を苦中お凌げど
 終少開る花
 比ま岩瀬
 主水の娘おらん

悪運隆盛お
 白銀を庫中お積ど終少消ゆる雪お比
 ま扶聊庵の主個
 粥川圖書

関運招慶お其名

悪運隆盛お



相州東浦賀

大賀屋町

海船問屋

吉寄惣

右衛門娘

おみこ

舊金森家御納戸役

千島禮蔵

へきんけい

せんと

うち

次



あらん 春の玉
権原 池上村の本門

ち八 弘安三年十月
十三日 日蓮大士修馬の地

あせ 八同宗の人々ハハハハ
そのとも 壺場ありきて 洗

いご 皮のハハハハ 昭和二年

十月の十二日 宮をささぐる業
町より 本門の舎式 執り

正徳部遠近の先登男女と山長珠おゆふたこ
 新書をききし餘り万端の
 けい況をけんぶつせんといふ
 家もんとまうの折玉光の
 正せきたるも前時浪士
 の羽川もあつとも
 ハじより口の思
 ぬいこのあま
 の思ふ
 田元
 上り町の
 げいふおくのあんなるが
 舟子の馬さす他をねたちまじの知
 合もあひざめき本もんちの宗徳大ま



ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま

わかでー川崎駅あー一たわと
 ままがまふらふらふ
 こみちをまがりて
 あゆまーが機方の
 村まのせいーむしの
 池もある岩水と
 いふ葉もをををくおこ
 はまのふらち向ひ
 田南みち
 田南みち



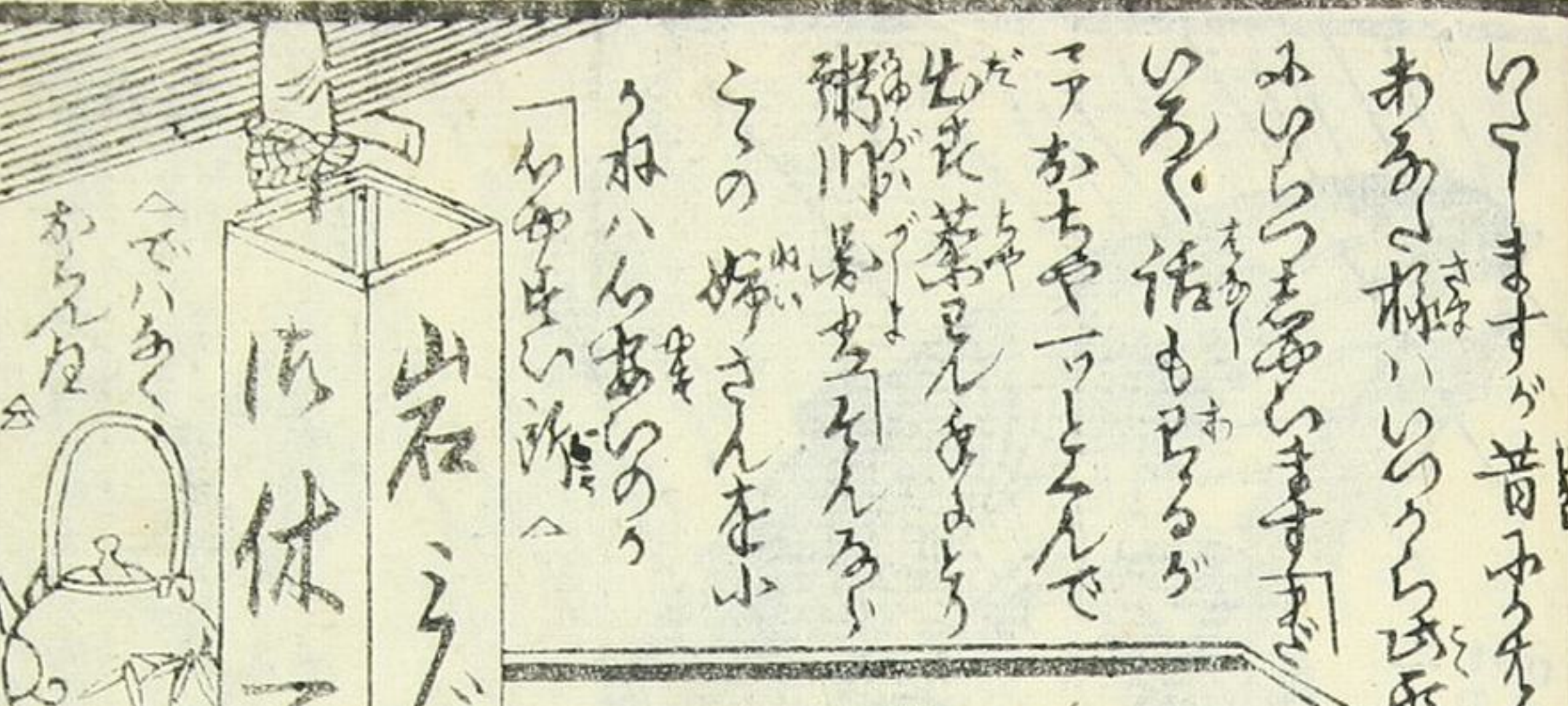
ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま
 ちあひざめき本もんちの宗徳大ま

久々あのお母もたつち
 久「エエまあお母さまの
 母もつねつね
 あつちや
 馬折橋
 をわわん
 中もつたつち
 づね中せどさらさら
 ころらねばそをのめを
 中「あつちや
 海まーたつち
 あつちや
 あつちや
 ハー町であつち



五へハ移のたつち
 をわわげちま
 あつちや
 振らあみだを
 八中多家を
 てより世若ら
 年のせんあ
 うねと二入

いますぐ昔あつち
 ああつちや
 おいらつち
 いつち
 子あつちや
 出花
 羽川
 この
 うねハ
 「つち



山石くら
は休所

世をゆてつち
 二入池
 細ひけが
 すいり
 考り
 の次

ふきみ付より小粒を十四五より子色んで小うねハ
七一引をハんの粒が寸志とあやぶる事から
斬さぬお好る相をとつてよて中さるは

ト輝たいあまをさる事

たせは易あうさ



△小因元も著
代をまひ
中りら岩水をなちゆか

母やうハいもくと利あ
んあ久しうる事さん
いらいもあがある
夜はとあせ川河のあ
小あうり喚あ春
開くも休てあてあ
これハ
まよ
この歳
屋ハ
たのあま
ハ大のあ史あ
てあけて下さの



向より来る人々の男をさるハ目や
みつけ「イヤ」ハ物いひさる井町の
足跡さる地
鳥羽もハあ
はさんけい
林うりてあ

蓮沼村橋中

「そせハ丁ださ
いとい何は後
あていあを
つひあさる
おちりあさる
の男ハ岩水の
庵九
をうけい
葉の娘ハ
あやの脊る
ささる
あのとあ
あさるくは
た今灰



田圃より人狼を下しアレキ
 と泣きひそを耳の中より泣きあはれ
 せんしせふおちよく来り郷川亭虫一人の男
 のあつみを投中して一人の利腕と
 つて揺あげそのを命業はひきせん
 侍はあはれ失けりおらんは侍
 是ををきて「あつみの侍
 の具船をる用いよ
 牛方の筆名
 の飛りま
 悪考が来す
 のあつみを投中して
 侍はあはれ失けりおらんは侍
 是ををきて「あつみの侍
 の具船をる用いよ
 牛方の筆名
 の飛りま
 悪考が来す

のお
 結納
 のお
 五十
 五
 十
 五
 十
 五
 十



おらんは母お次身を吐くくつおらん
 金入を蔵せしことく辱せしつ終失
 せし中をもの侍るお母へおらん
 あんく原く礼をのる尾あき
 周元ハ小膝をさるおこれお
 あわのおおさぬハ去り流る
 のたまさきおらんおらん
 おらんを
 母ハ一孝をそさるおらん
 トラおらんおらん
 おらんのおおさぬハ去り流る
 おらんのおおさぬハ去り流る
 おらんのおおさぬハ去り流る

おらんのお母
 易虫用元
 ハおらん

○川崎の夜やの裏におおの東浦架き舟町
 中へ俠客といふも 北横屋を山に
 と野地町の江にや 津波はる舟
 小舟をおもひ中へ さうのまを巡ら
 せしう小舟にせよさうち面
 同身あつと浦架のまつり
 へおまをせしゆらとまきや
 ありさうの津波をさう
 互の胸もあ
 へーあつてふ
 おまはるんか
 さいこのらま
 舟のまらうら
 便りもせぬの八束りてごんま



△まま
 つて
 のへま合
 まんり
 あの娘の身
 おん八束のあ
 方の津波をさ
 へ舟のまのま
 舟人

恨もるあけをす
 八束の四もて
 みるあんの
 てたの合
 のまねども
 舟へ尻をもち付ぬので
 幼なとせん日づけの舟を
 ゆへいづもせさるうらうら
 及ゆのあふきのあけで近
 へ衣れや舟のあふきのあま
 ちるあるるるふ山に舟やと
 るをさうのあふきのあま
 をさされてさうの困中へおとせ
 あの葉やへささるたのあさわ



△まま
 つて
 のへま合
 まんり
 あの娘の身
 おん八束のあ
 方の津波をさ
 へ舟のまのま
 舟人

つきのへとあらうく
きけせうがう池上る

たんなまともうふ
料理茶屋
で紛失た糸

ちよひあるの
とと氏まふ
織名付て
表取柄のふる

きをそををさごめ回れあらためくをせまら
袋のくまみあふるでたふ我苗字千燈と
たふあてあふるは申お包みあふる包
杜志の糸糸あふるせんまふるとや包
を改たふちがらう対大首を切てもたふる



ひをかたふのや
しこの者の建作也

んせ
かん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん
ん

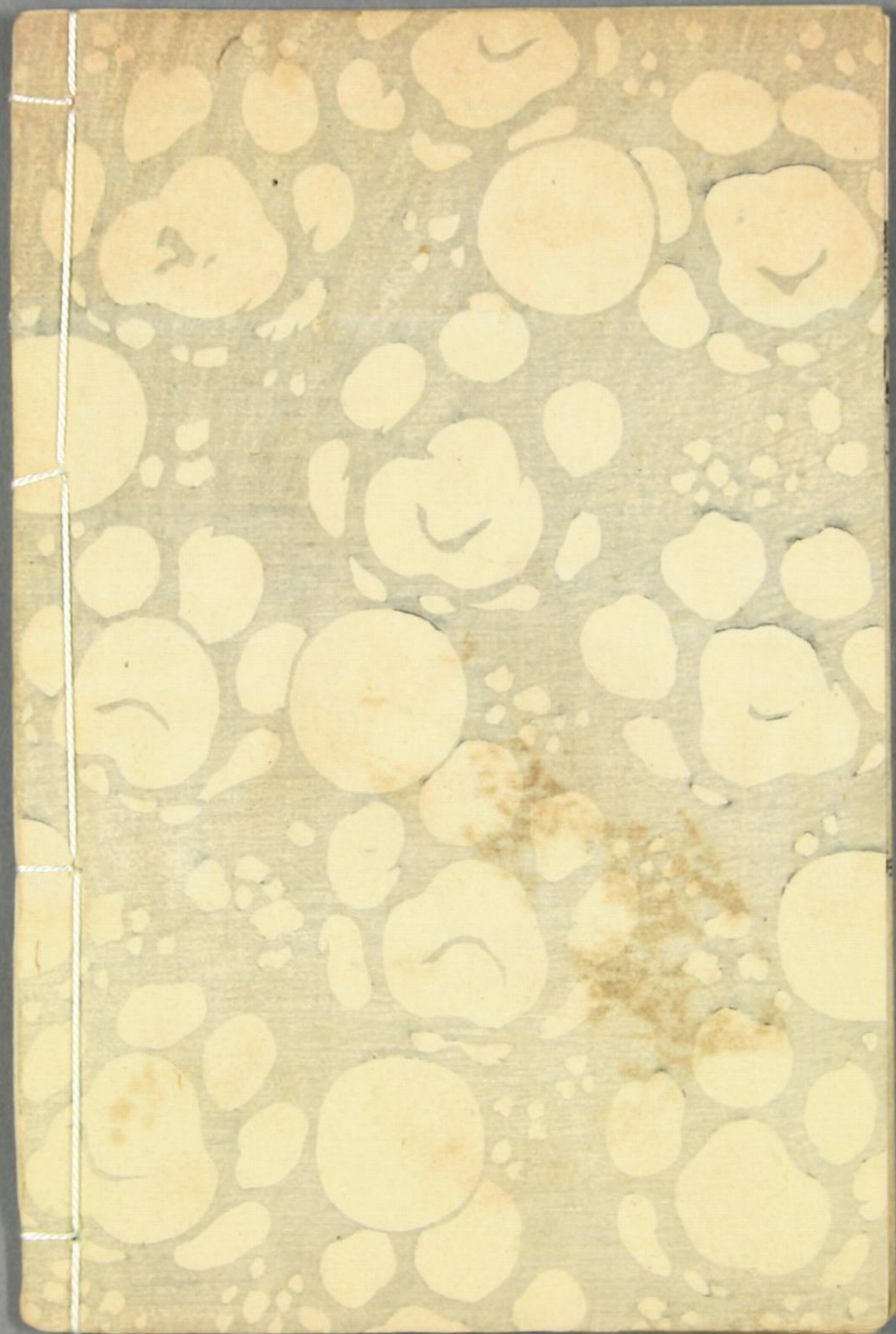
神田區仲町壹丁目番地

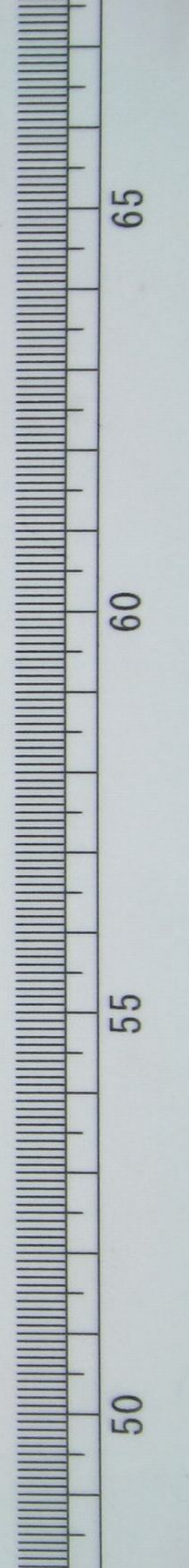
編集者 篠田久次郎

浅草區吉野町六拾五番地

出版人 山村金三郎

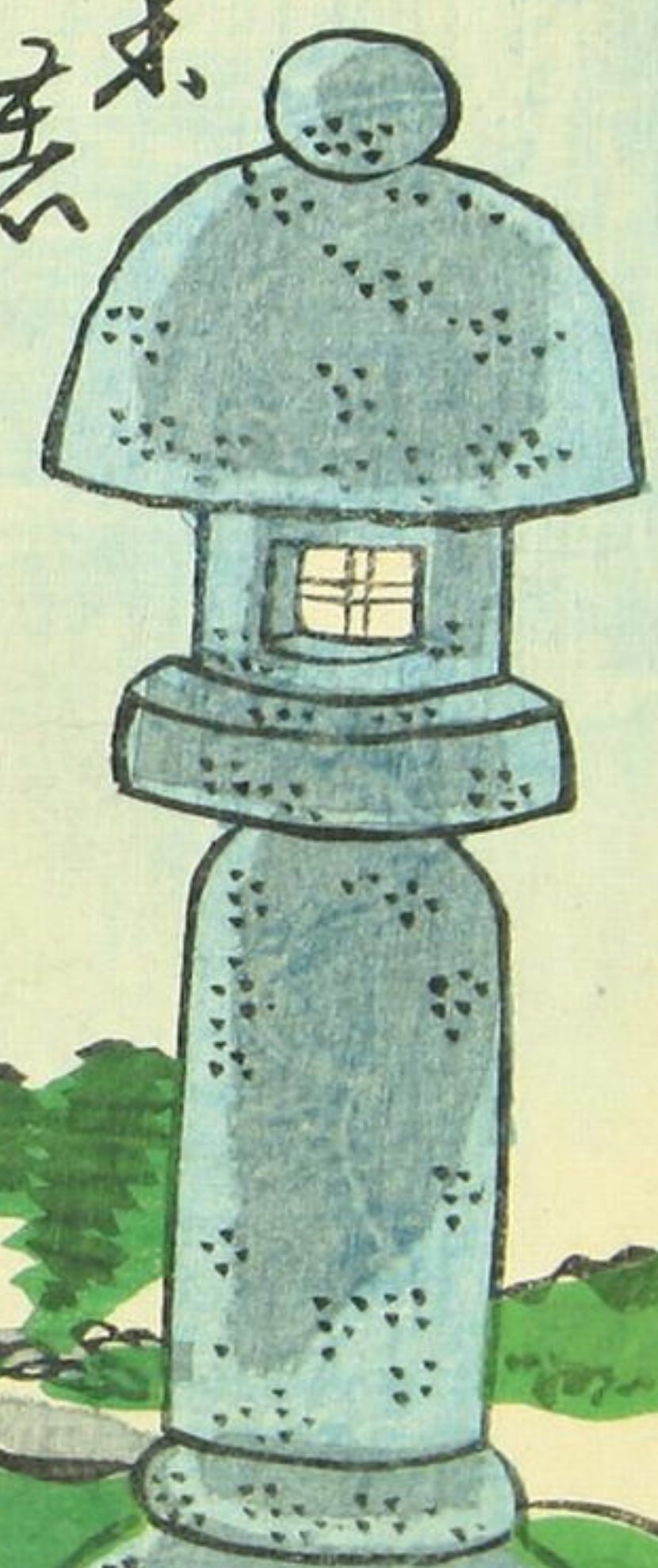
明治十二年五月 日御届







仙
春



花

花

芳
春

山
松
堂

春
持

和
輯
中



上の巻つゝ... 春の主人の侍...
御をうけし... 更...
許さけ... 傍の...
後... 侍...
山... 賀の...
は... 考...
知... 出...
中... 後...

春
持



つた品がらん
ねんかき徳と
まる候

記者申かの侍が山三の金入を

西村のせしんからん
と強哀せん
せし折尊ひ
るのし見入たう
尚のちの候と
合せてん

山三
あわれ入
金五あを
紙のせ
高のちの候と
合せてん

行のせう 又佐義とまはらふせ
も敷もかき免くと申
モテ奪れらるる金高の
五あ金をこぼり 中まはら
依の先刻流上の丹波屋を米
藤どのと一巻の香で唐の如とありお
屏の今侍のつらなる中盗まれら
しうばあを彼奴とんつけし人包を
を理よあつためたもど私のあつたれ
た甲しん入れお逆さ中経路のそれあ
たもどお徳あけれ入のまはら
井るがはあ本のあつて思ひぢま



山三
あつたれ
よろとびのト方
あつたれ
れとのべまゆる

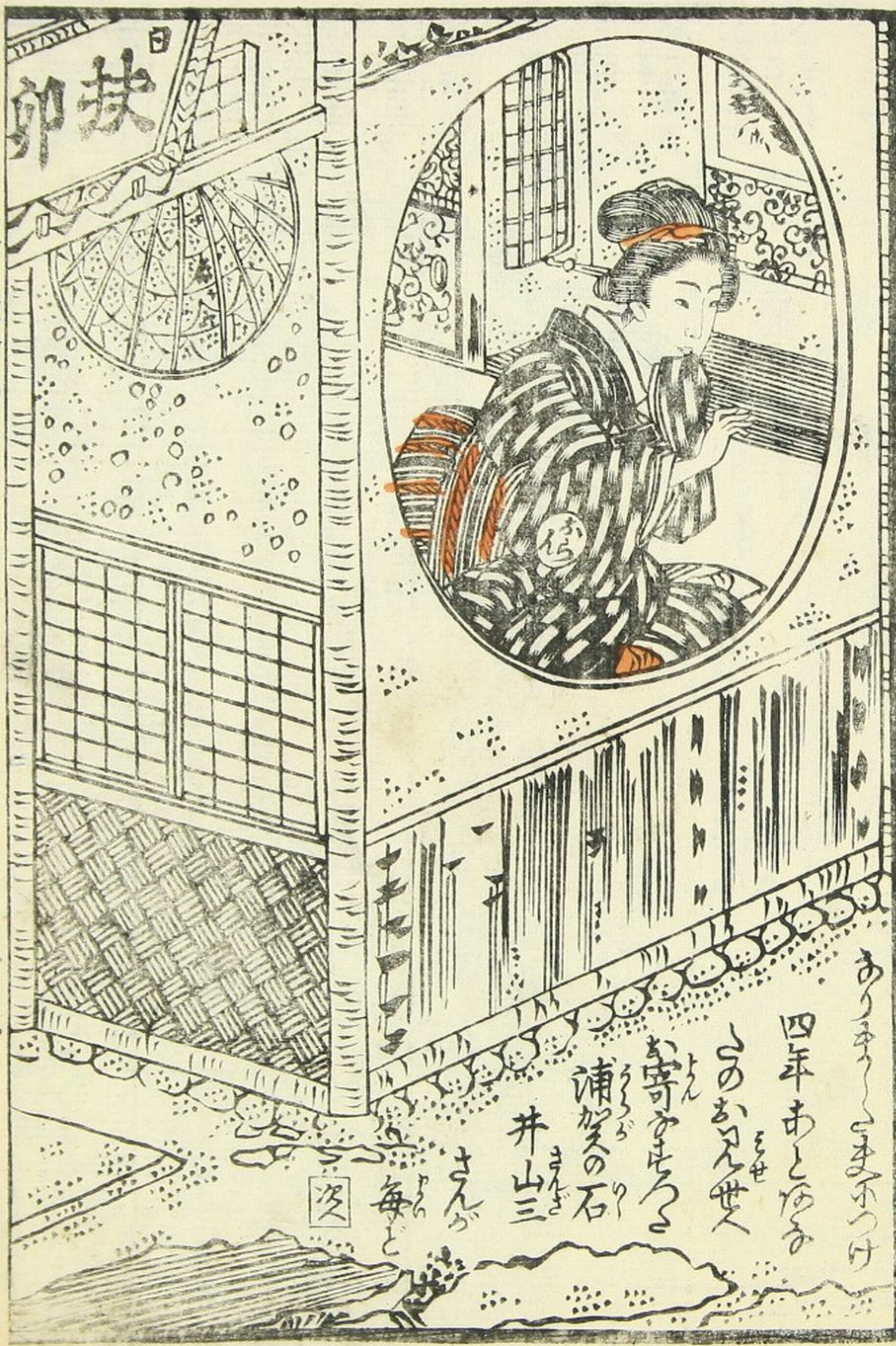
山三
あつたれ
よろとびのト方
あつたれ
れとのべまゆる
山三
あつたれ
よろとびのト方
あつたれ
れとのべまゆる

つぎののがけに一同あぢや入海りたり
 こまろう四年 明和四年四月十日あぢや入海りたり
 たちの物 義経の舟のくまの白浪の樹木名ある
 うらりあり



法皇公大御儀へあけのせしめど
 そち其御所へをまことろ粥を
 湯中よりお給奇せし枝
 神く庵へ立られぬ
 ようのづる岩殿
 ありん可ヤヤ
 あぢやあぢや
 おぢやあぢや
 あぢやあぢや
 あぢやあぢや

あぢやあぢや
 四年あぢや
 のあぢや
 おぢやあぢや
 浦笑の石
 井山三
 さんが
 毎と
 次

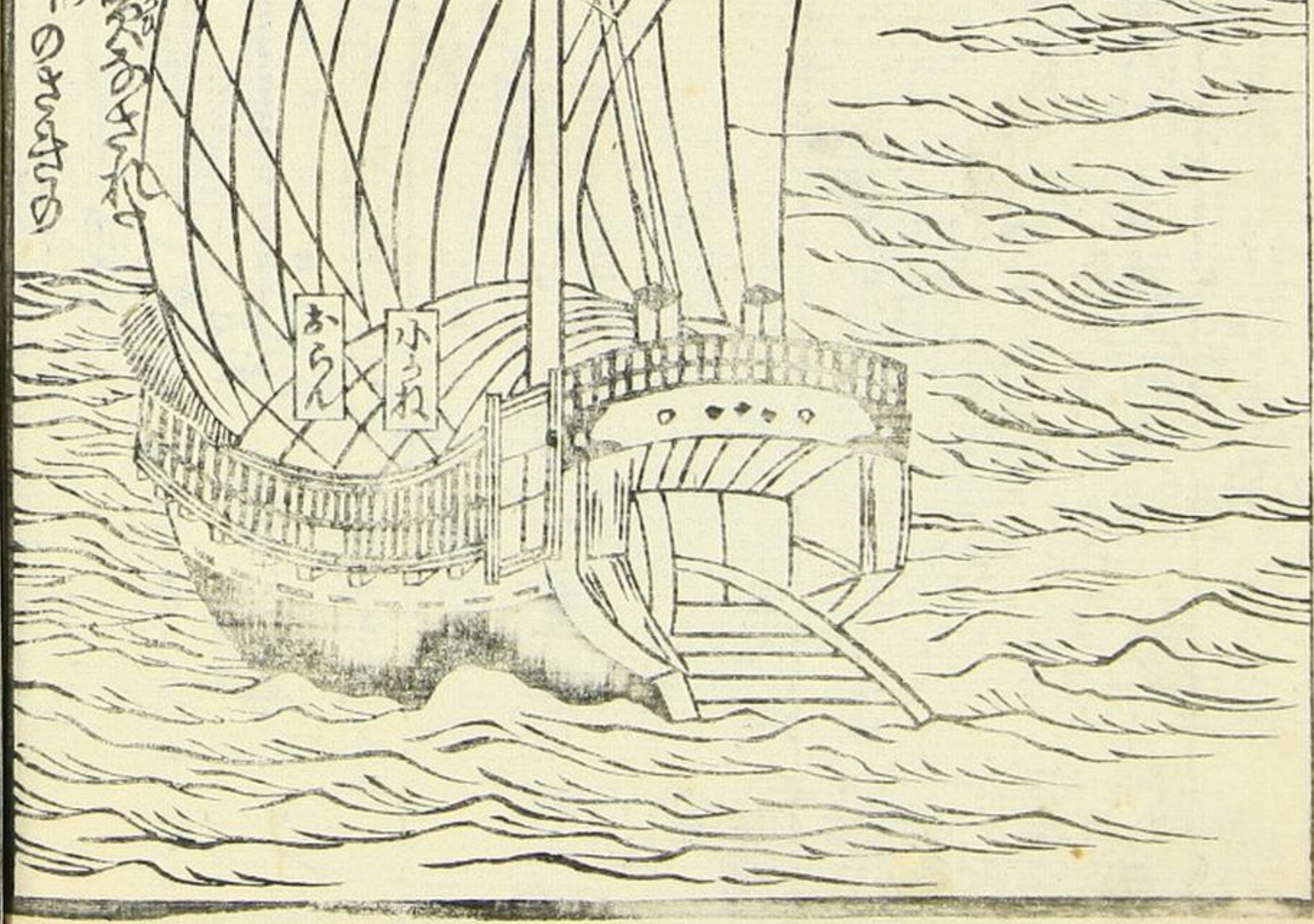


卯扶
 三遊中
 四年あぢや
 のあぢや
 おぢやあぢや
 浦笑の石
 井山三
 さんが
 毎と
 次

浦笑 野島 切みお人 今入を



浦笑の木村 御さる 夏島



有じ 次舟を 助けて

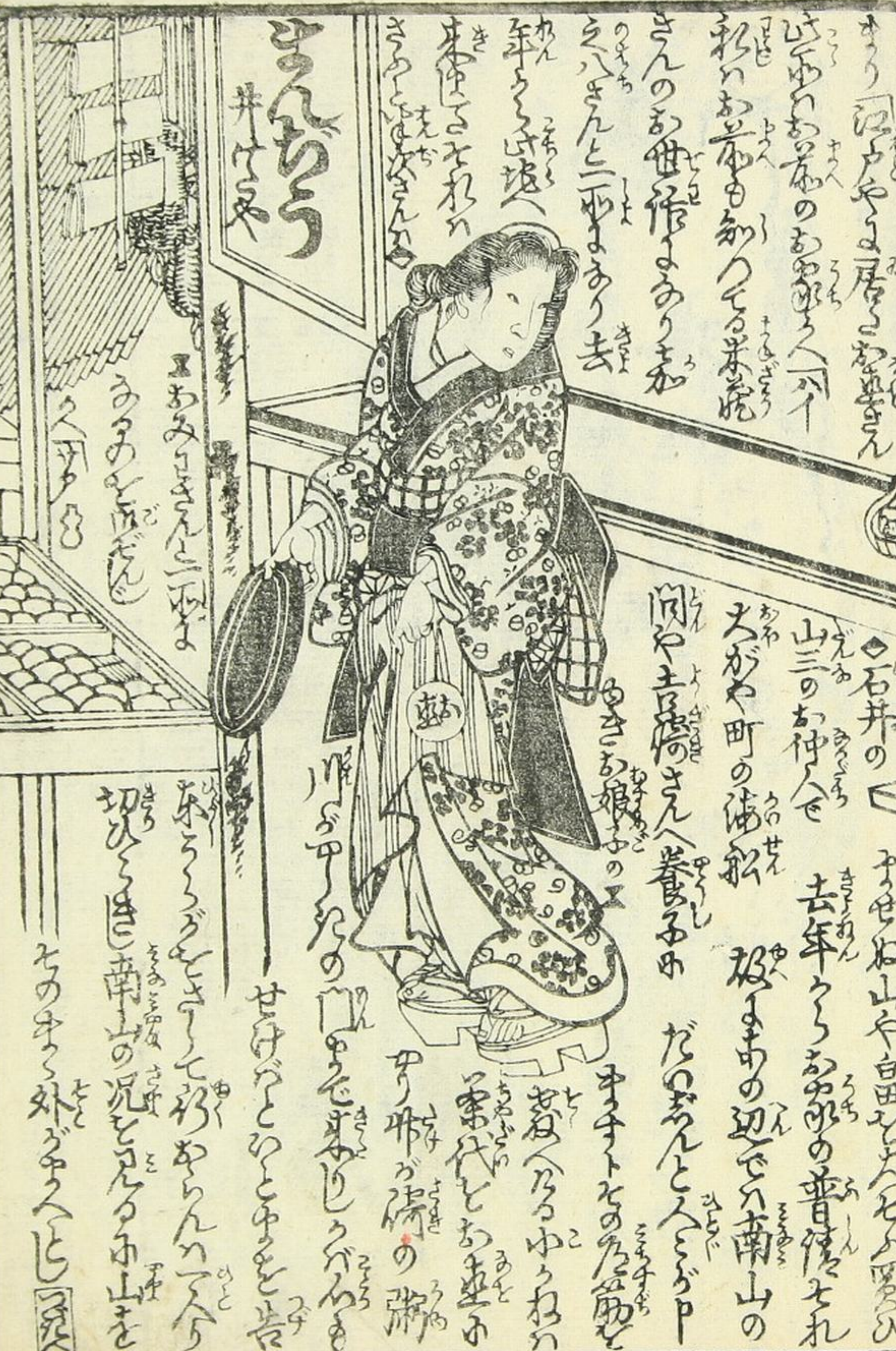


下中 日新のいとよみ 江戸の事

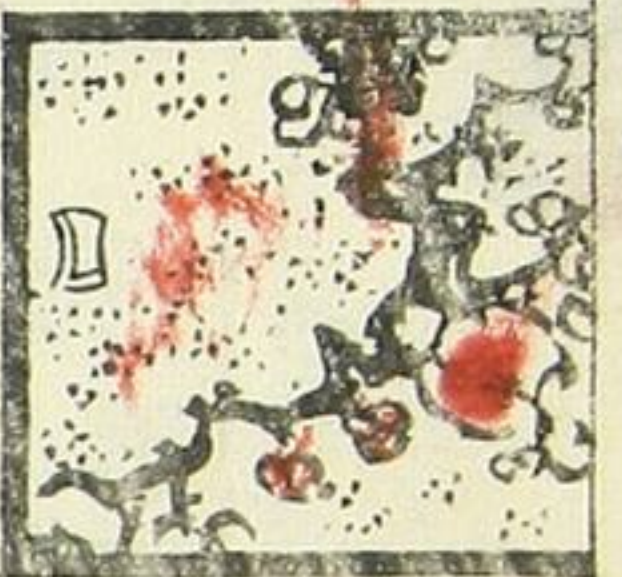
我宿(やど)にけしきりつるまののめりあはるるの宿
 よう船(ふね)のりご退風(たいふう)をよよと吹(ふ)けきり浪(なみ)の
 のこるらあまざらららららららららららららら
 めりしとおめ(おめ)の浦(うら)はきり
 ある海(うみ)の名(な)を船(ふね)のりあはるる
 八(や)つとてらら同国(どうこく)の後(ご)復(ふた)りあはるる
 わらわらら安内(あんない)を三(さん)所(しよ)所(しよ)
 女(にょ)のまん(まん)をきりあはるる
 房(ぼう)がわ(わ)をきりあはるる
 声(こゑ)をきりあはるる
 中(ちゆう)ねえ(ねえ)の寄(よ)りあはるる
 りあはるる
 石井(いしゐ)の
 山(やま)の仲(な)い
 大(おほ)き町の浦(うら)松(まつ)
 問(と)やま(ま)のさん(さん)へ(へ)養(やう)子(し)の
 中(ちゆう)ねえ(ねえ)の寄(よ)りあはるる
 山(やま)の仲(な)い
 大(おほ)き町の浦(うら)松(まつ)
 問(と)やま(ま)のさん(さん)へ(へ)養(やう)子(し)の



中(ちゆう)ねえ(ねえ)の寄(よ)りあはるる
 りあはるる
 石井(いしゐ)の
 山(やま)の仲(な)い
 大(おほ)き町の浦(うら)松(まつ)
 問(と)やま(ま)のさん(さん)へ(へ)養(やう)子(し)の
 中(ちゆう)ねえ(ねえ)の寄(よ)りあはるる
 山(やま)の仲(な)い
 大(おほ)き町の浦(うら)松(まつ)
 問(と)やま(ま)のさん(さん)へ(へ)養(やう)子(し)の
 中(ちゆう)ねえ(ねえ)の寄(よ)りあはるる
 山(やま)の仲(な)い
 大(おほ)き町の浦(うら)松(まつ)
 問(と)やま(ま)のさん(さん)へ(へ)養(やう)子(し)の



ついでに
奥の山を
見るも
見るも
見るも



今更なる
今更なる
今更なる

花櫃の牡丹
花櫃の牡丹
花櫃の牡丹

そのまの
そのまの
そのまの



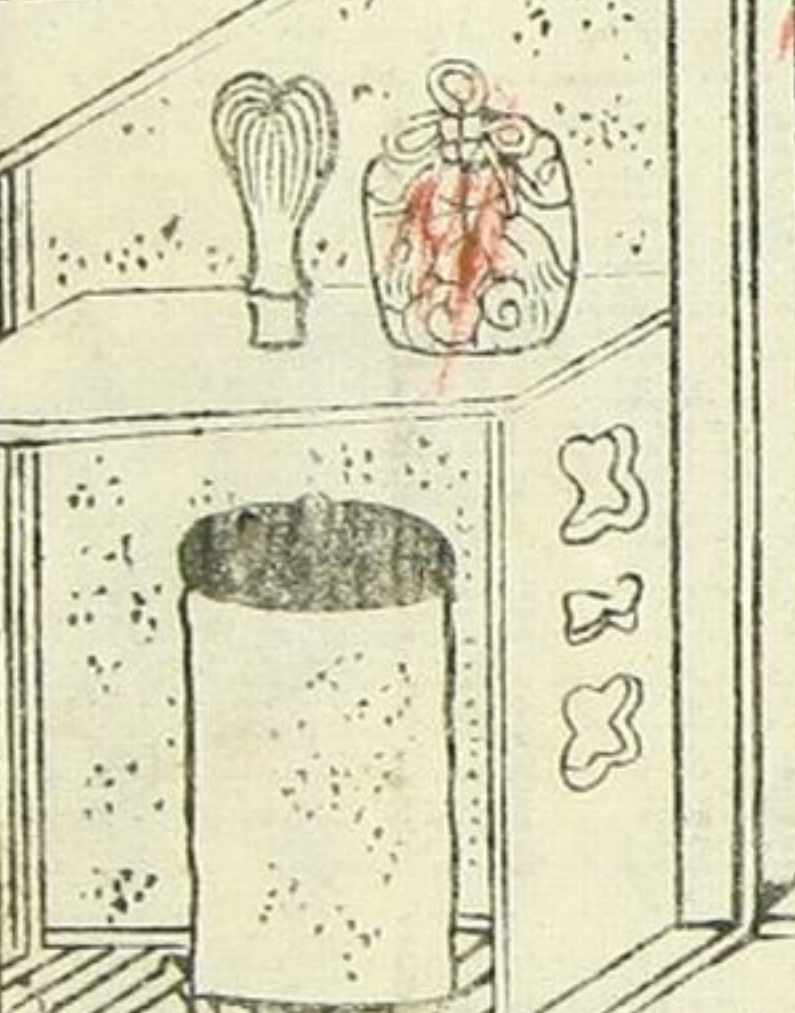
あて別よ
あて別よ
あて別よ

そのまの
そのまの
そのまの

その見
その見
その見



あつは
あつは
あつは



あつは
あつは
あつは

三遊中
 一七
 本心おぼれもえの
 如く居間かよれが
 下男の長次青三種
 調理は飯
 櫃とめぬぞう
 そろろおねく揃か
 合やすまのぢう
 ばやまのよる
 あまねて下さ
 中一からい
 夕飯もまわらぬ
 燈もつゆ布
 長次もろろ隅り

三遊中
 一七
 本心おぼれもえの
 如く居間かよれが
 下男の長次青三種
 調理は飯
 櫃とめぬぞう
 そろろおねく揃か
 合やすまのぢう
 ばやまのよる
 あまねて下さ
 中一からい
 夕飯もまわらぬ
 燈もつゆ布
 長次もろろ隅り



本心おぼれもえの
 如く居間かよれが
 下男の長次青三種
 調理は飯
 櫃とめぬぞう
 そろろおねく揃か
 合やすまのぢう
 ばやまのよる
 あまねて下さ
 中一からい
 夕飯もまわらぬ
 燈もつゆ布
 長次もろろ隅り



神田區仲町壹丁目六番地

編集者

篠田久次郎

浅草區吉野町六拾五番地

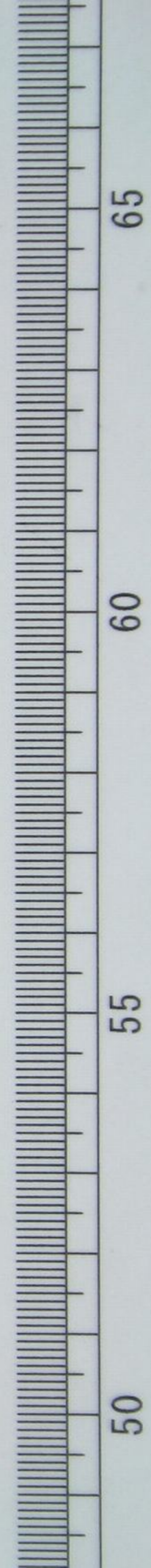
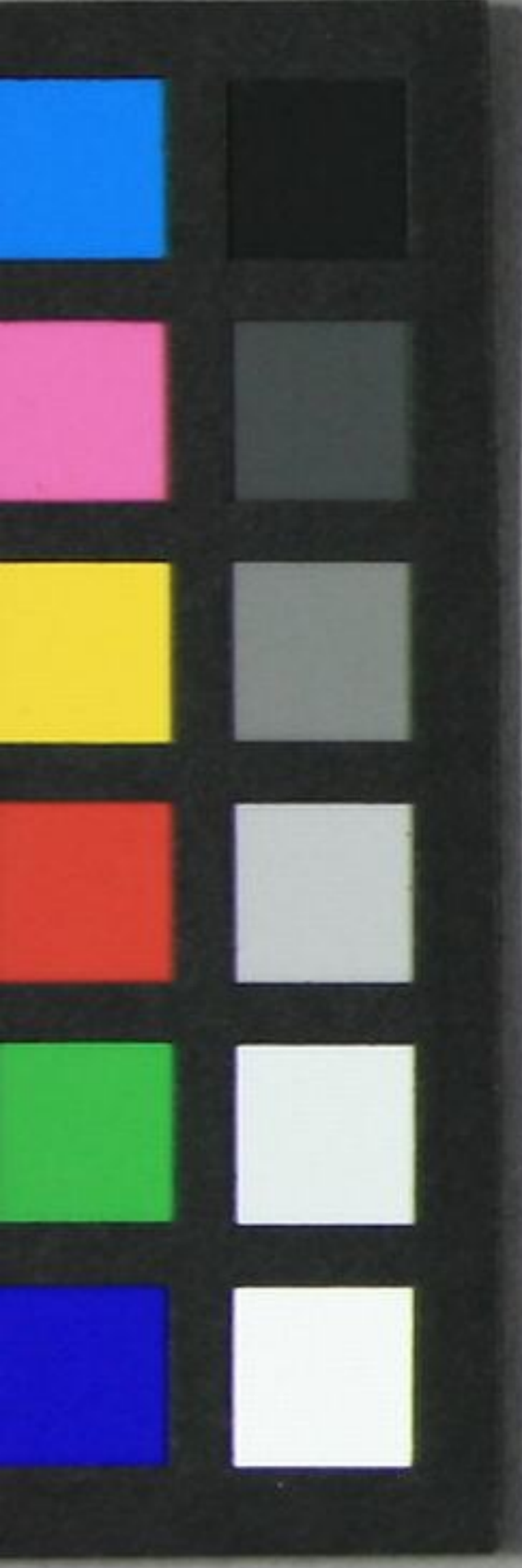
出版人

山村金三郎

明治十二年五月

日御届





雲

仙果美

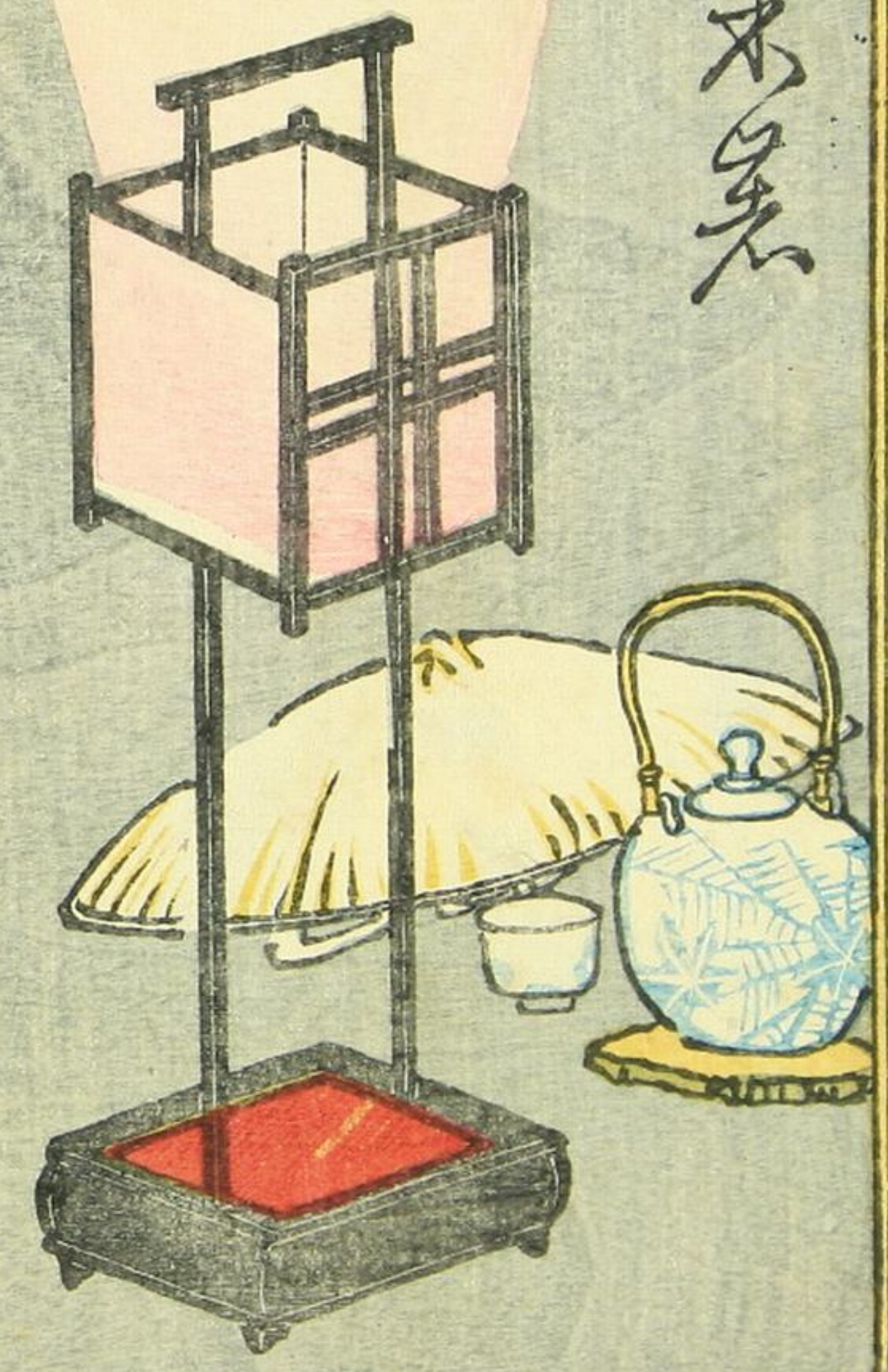
月卷

とぬ

新祓

芳事あり

初詣下山祓事奉の持



甲の巻つゝ志をまろく有りてか由川_{わが}夢_{ゆめ}虫_{むし}さび_{さび}し_し

なちよう_{あや}今_{いま}宵_よもよ_よま_まの_の集_{あひ}

舎_{みや}あ_あん_んと_とこれ_{これ}より_{より}垂_たり_りね_ねが

あ_あね_ねあ_あら_らひ

世_よ用_{もち}ろ_ろお_おね_ねも

風_{かぜ}も_もた_たま_まふ_ふ吹_ふ出_出

や_やぐ_ぐて_て四_よツ_つゆ_ゆあ_あり

ま_まま_ませ_せ物_{もの}よ_よあ_あら_らん_ん合_あ

せ_せあ_あら_らう_うま_ませ_せ物_{もの}

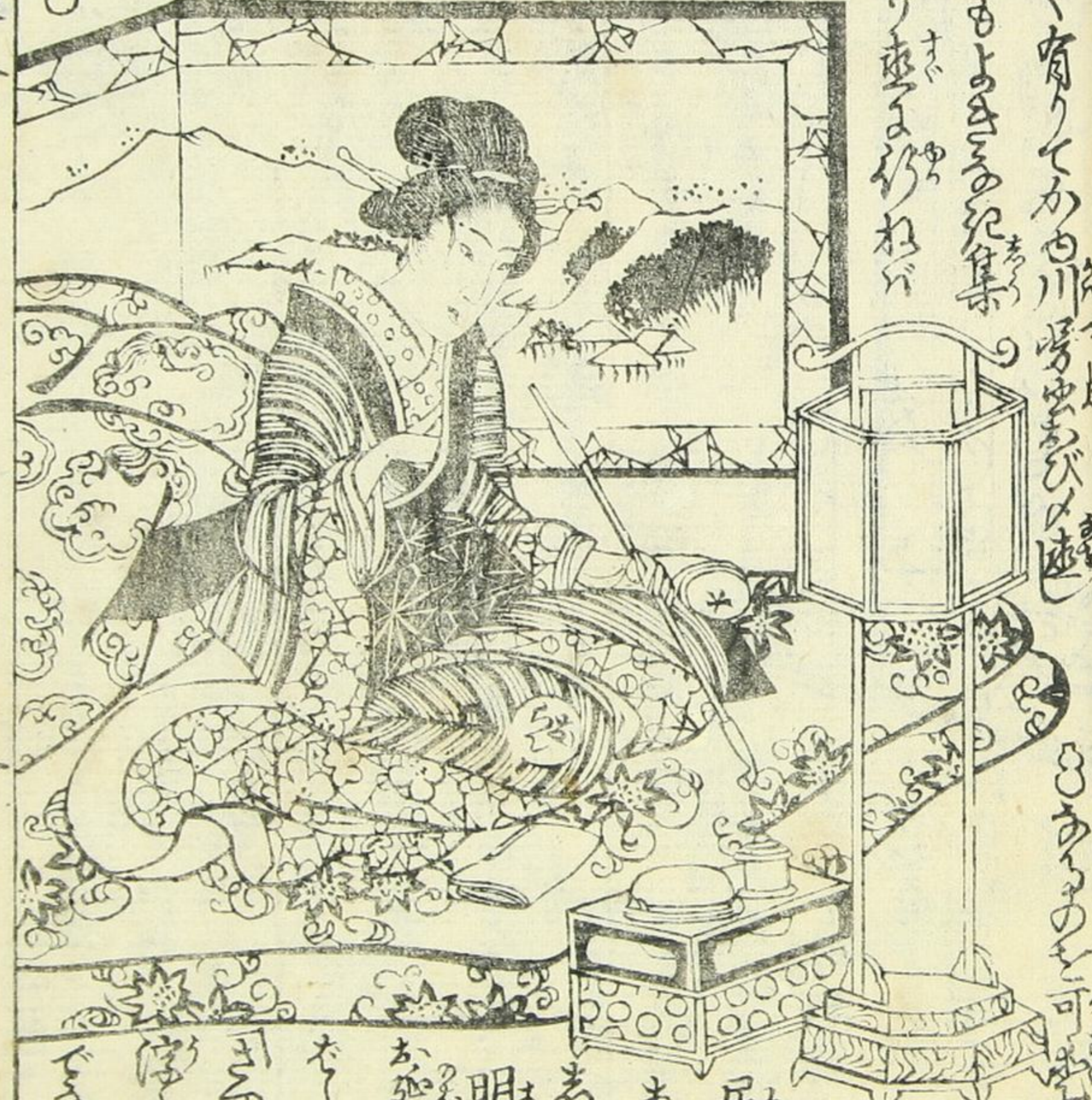
東_{あづま}の_の一_{いっ}色_{しき}も_もあ_あら_らん_ん

い_いま_まの_のま_まま_まの_のま_まの_のま_ま

絶_{たぎ}一_{いっ}そ_その_のや_やり_りみ

半_{なか}の_のあ_あは_はれ_れの_の

半_{なか}の_のあ_あは_はれ_れの_の



い_いま_まの_のま_まま_まの_のま_まの_のま_ま

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

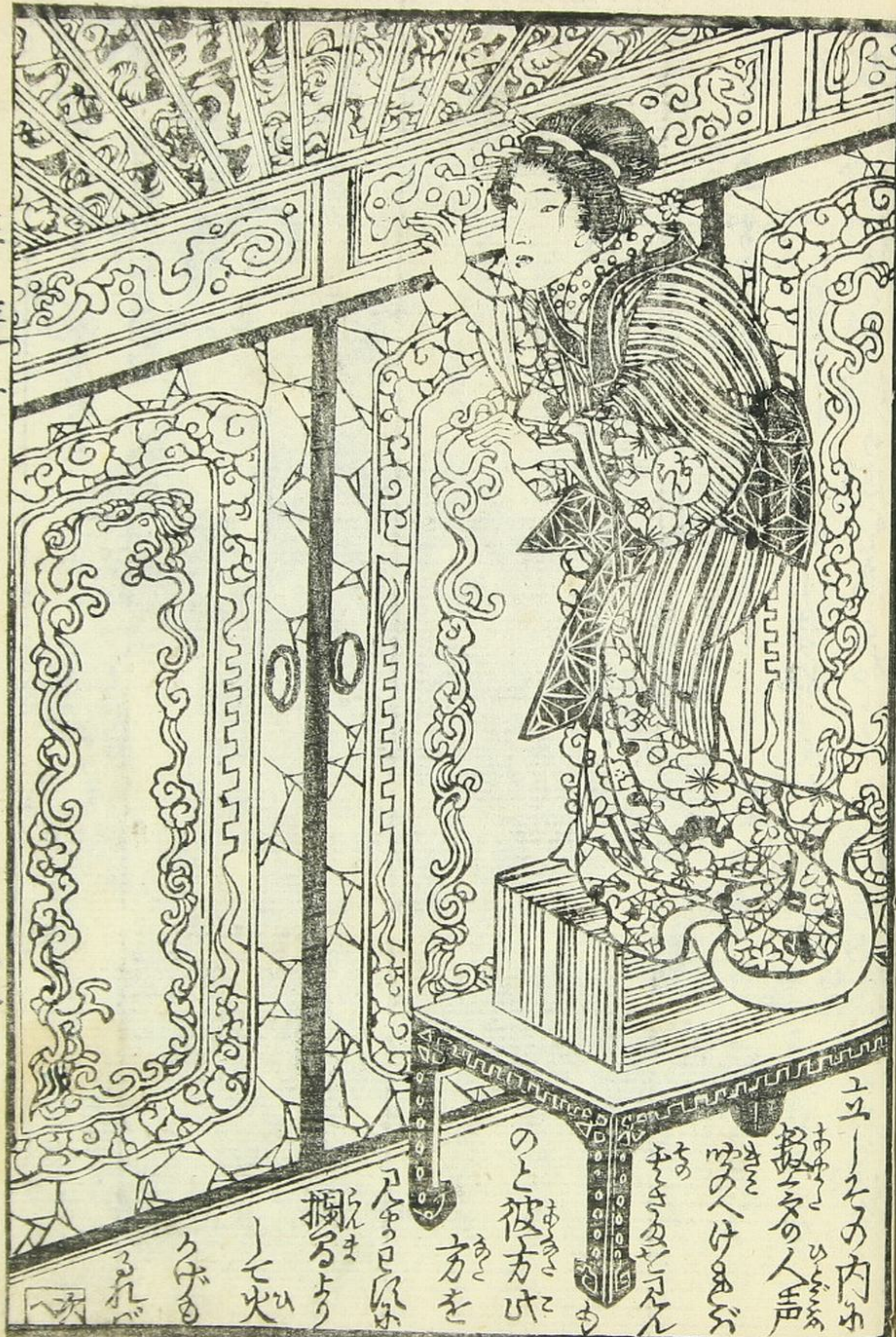
あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん

あ_あら_らん_ん



立一その内
 敷之入声
 鳴之け
 ちんちん
 のと彼方け
 方を
 八千三百
 振るより
 一七火
 うが
 ぶれ

内へ入りの本
 押す
 かの
 響の
 あり
 あり
 あり

内へ入りの本
 押す
 かの
 響の
 あり
 あり
 あり

内へ入りの本
 押す
 かの
 響の
 あり
 あり
 あり

つたか—より現をよこ

傍あり机をひき

よきを第を

と入つみ

重ね足音者の

おせよ昇り

身をつめ内のこまを

何ひんふ用あり

家を

あつた—五尺籠をわらう出せ—きぬよて仕

軽—度神をきけおの皮をまるとわらう上

初めたる千ぢれは

居

居

居

居

おひらげさるもの

お人むらんの

るま—下が

あつねと思

えおりと油だ

あつた—て

あつた—て

かつた—て

去年の—て

おりち町人—て

おひらげさるもの

お人むらんの

るま—下が

あつねと思

えおりと油だ

あつた—て

あつた—て

おひらげさるもの

お人むらんの

るま—下が

あつねと思

えおりと油だ

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

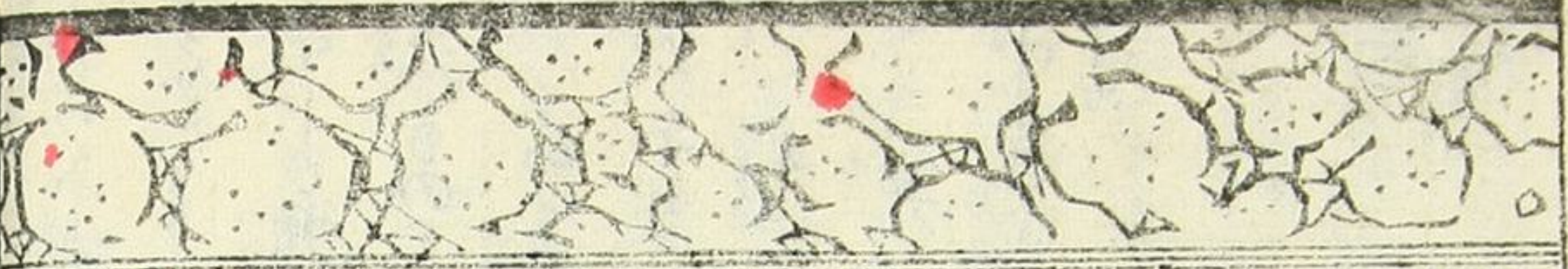
あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て

あつた—て



仕をこし廻り廻りの
 そのまひしきまひから
 むみやたきまひを
 廻らそ今中を余り
 出さぬ寺人目をつけ大を
 へる今を福と
 夢の人のある大時
 のたみ尻をきり五
 百あのはるの
 なるまうくかの上
 清
 和尚たぬ
 ちるまう上三



◎活者りさかびねねど
 誰が去来うく損り癖を
 あされがやうく目付この
 女中浦をきり
 一帯大かや町の海船
 隠る吉原の秘さ
 もの名やで平正のむま
 めのちみさかん音系
 子の房りをきり
 引らうのをきり
 りのよ干をきり外
 イヤサ周え坊きり



百あもの仕甲下金子
 骨中のそと出せり周
 えいゆり出金
 さらめ目と付
 石ぐらの
 中へ



ねはま
 安のと
 のかき
 娘もえり
 千を
 目付
 今そこ上雨ふ本乃医
 者と化て居まこと
 旅あゆまを旅者
 枕さうや

胡麻のそい

からわんまよまこねまよま

秘のびんかあひや

教をて中りを五百や

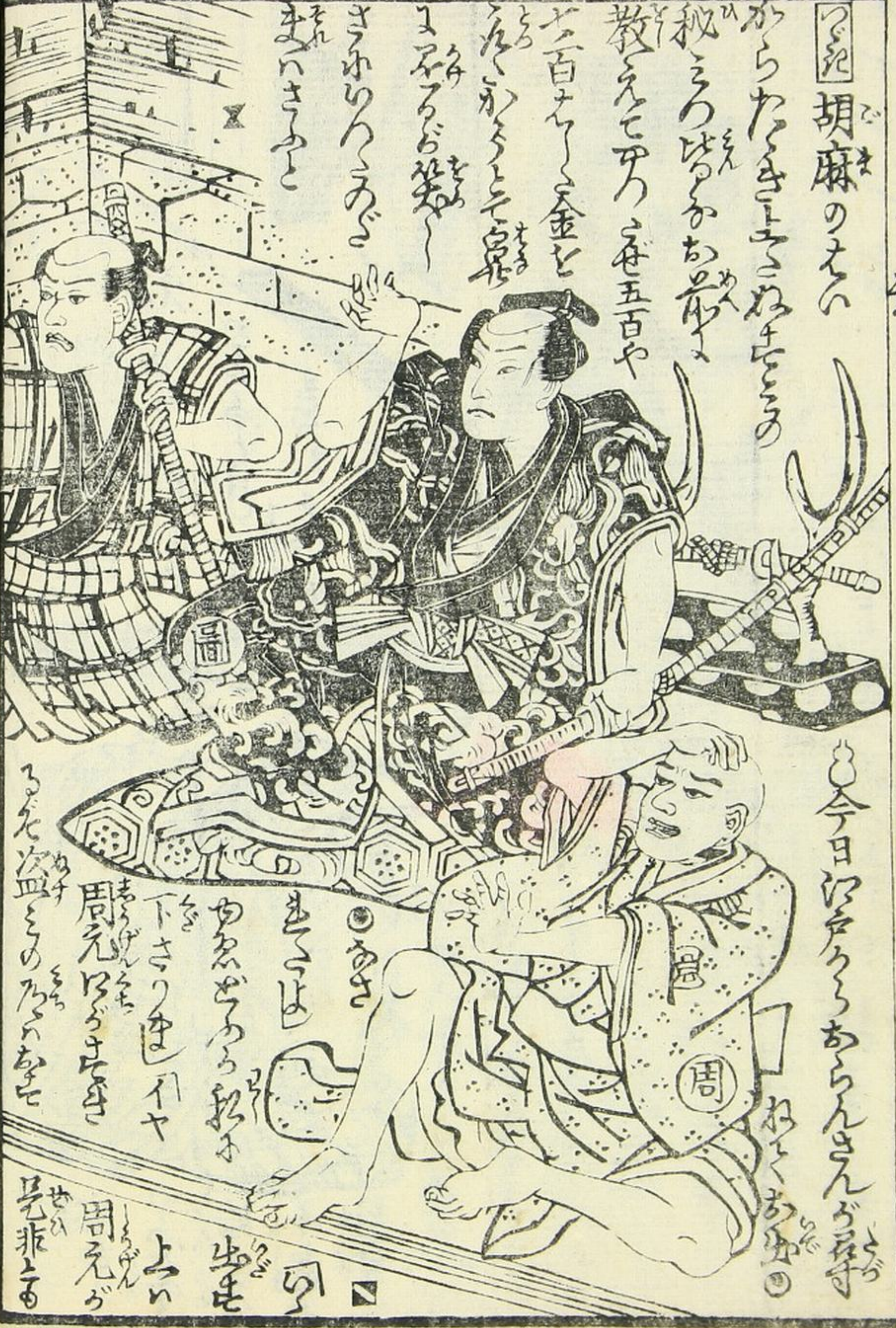
七百ちり金と

なぐかろとそま

又するらま

まゆりんてめ

まひさ



今日にやうくららんきんが

ねあひ

周

まよ

あま

下さつはイヤ

周え

周え

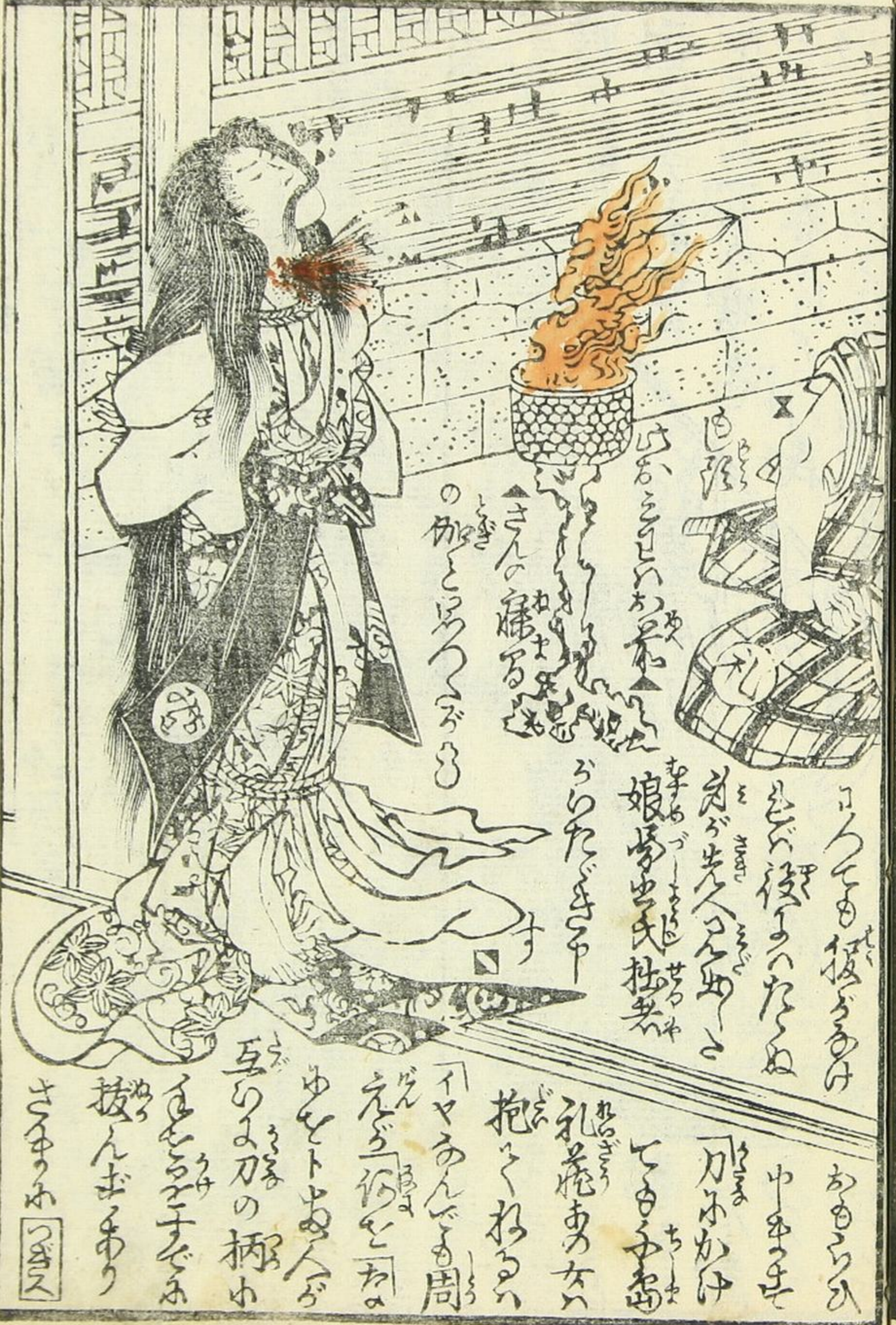
周え

出ま

よい

周え

是非



はな

さ

の

か

の

か

の

の

の

の

の

いん

ま

あ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

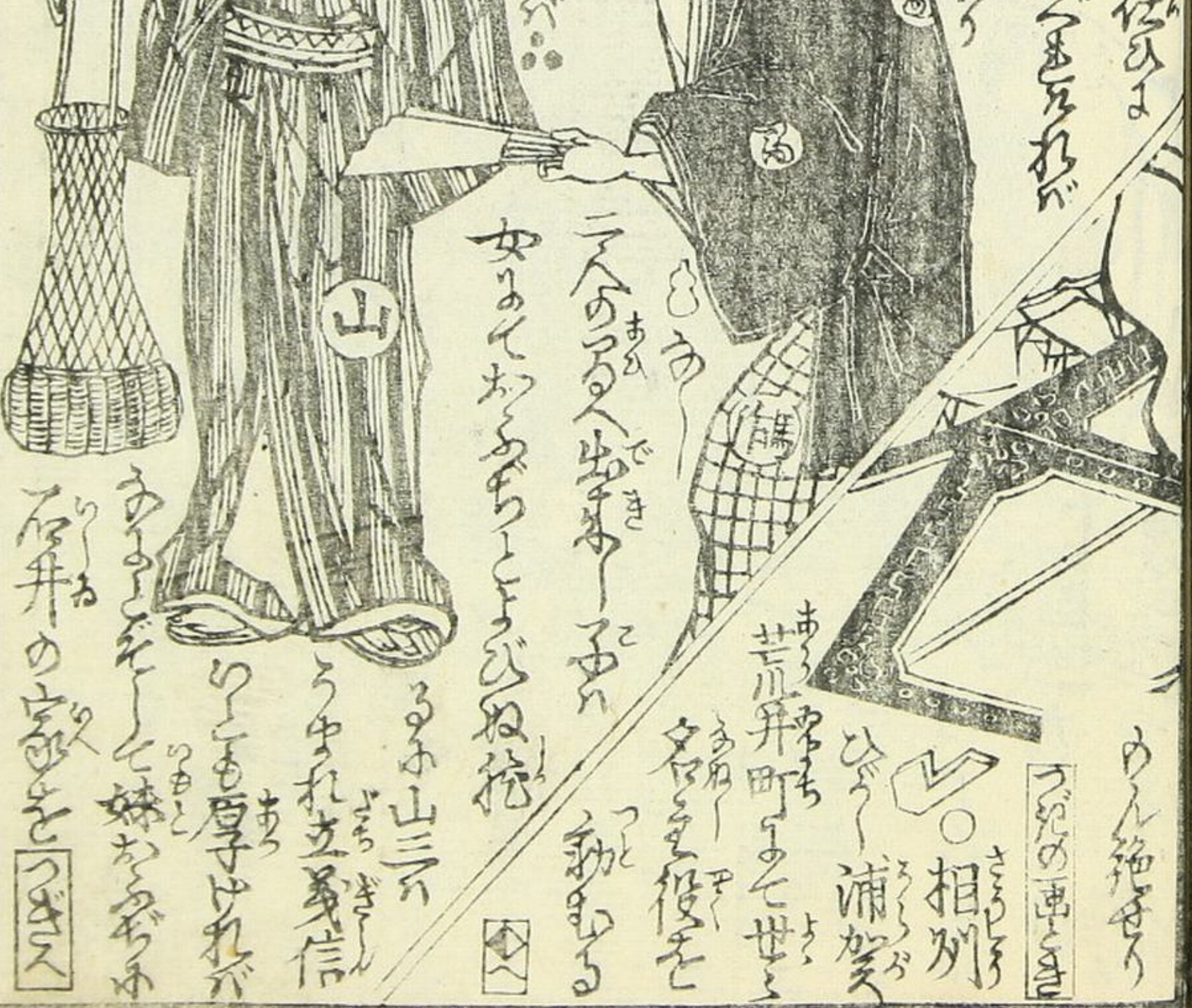
珠川屋の傍ある
 こまの木の柄をぬきエーと
 打つるより短のぬらひ遠く

石井三郎
 兵庫の長
 男山三郎の履
 歴をさつふ母の
 おはらふ家の娘よて
 年十六の春よりそ行哉
 死んぬあつひの浦笑をり

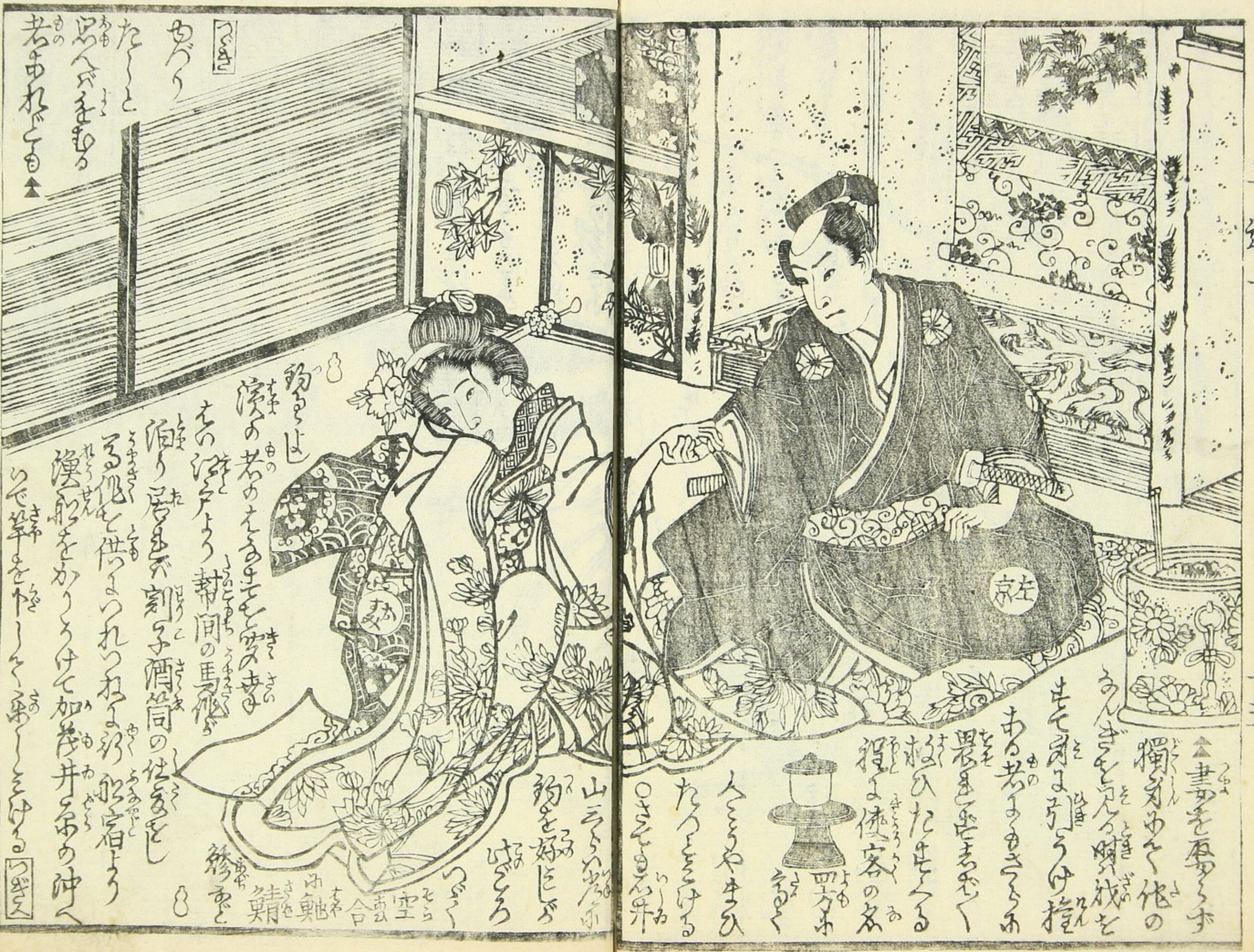


おみよの御元グサとをさかりか
 打込んだららん中の透下より
 一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり
 一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり
 一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり

一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり
 一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり



一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり
 一色な糸の郎へ腰元はひよ
 出せらる容姿女のまごころわが
 主人たるもの目よとあり
 豊年あまの
 山三郎あり

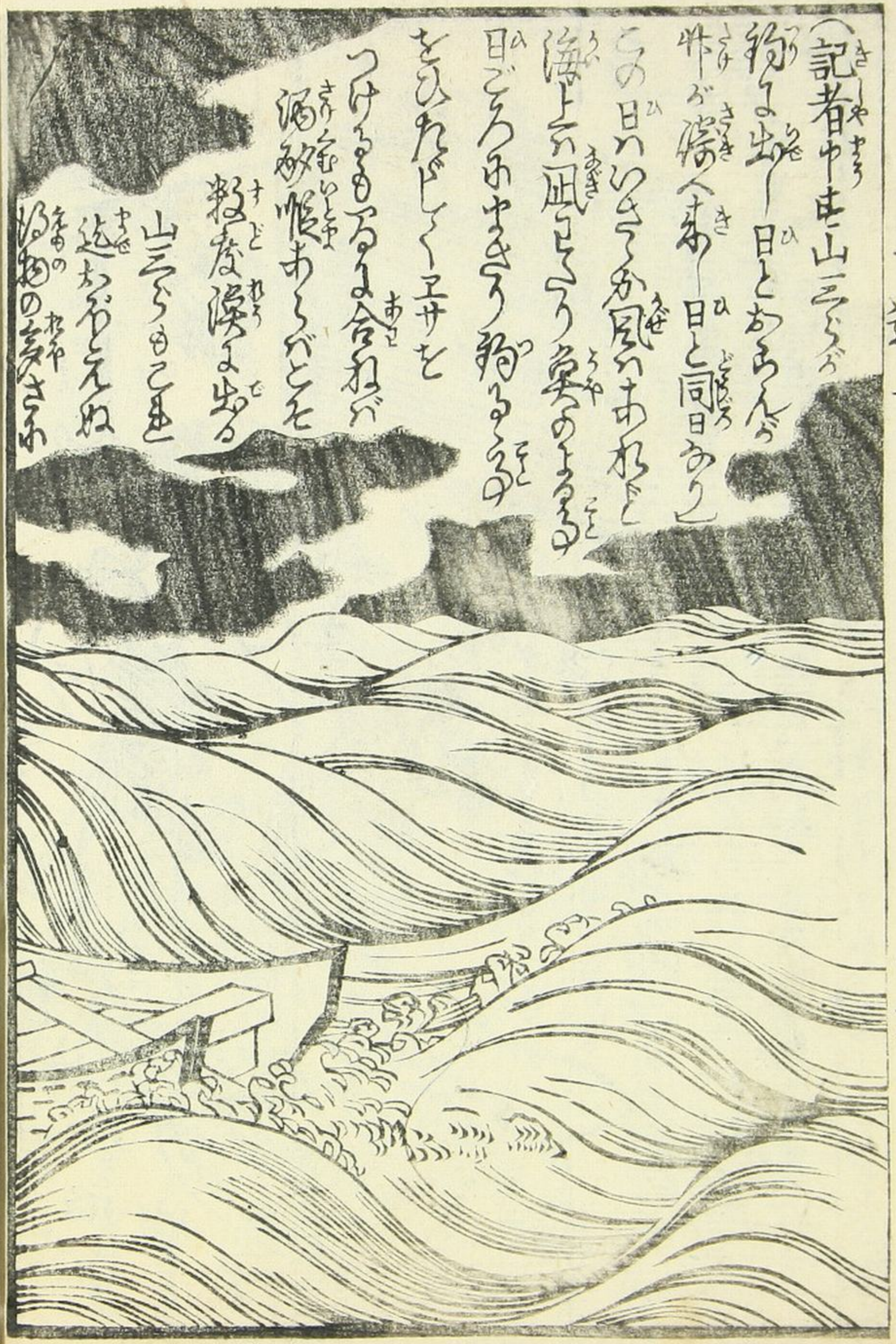


若由ねごも
 若由ねごも
 若由ねごも

物よは
 淡の若のたもほまほま
 かの海戸よう 軒間の馬
 酒子酒筒の仕
 漢船をかりりけて加茂井の沖へ
 りで筆を下しとる

山々々々々々
 物を好む
 人々々々々々
 たんたんたん
 〇〇〇〇〇〇
 書きを要する
 獨りめと他の
 生て引くうけ
 あり若のまごも

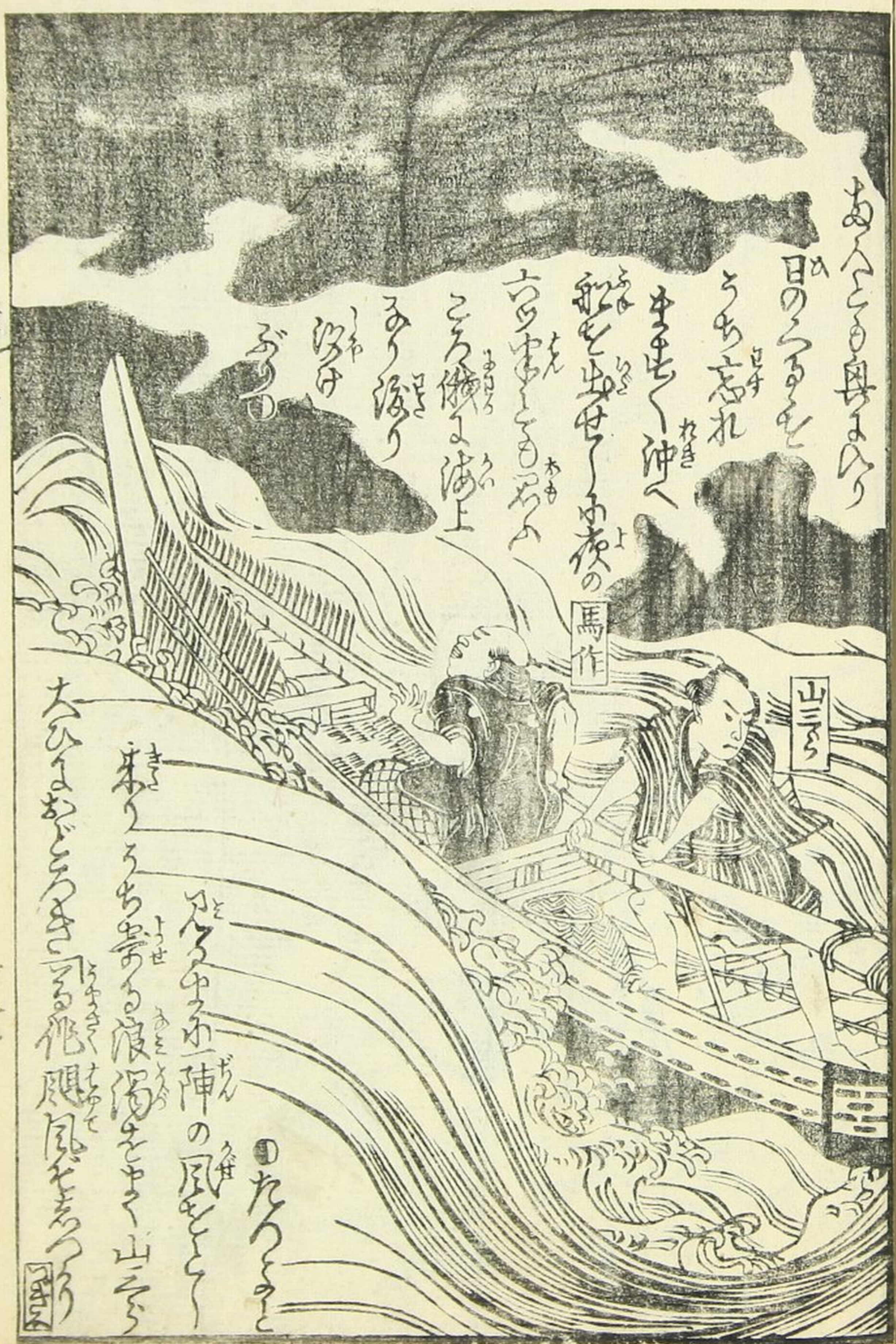




記者中庄山三三三
 物よ出日とおらん
 牛が傍へ来日と同日あり
 この日いつか風かおれど
 海上の風はとうるまのよる
 目ごころあまきう物もる
 をひねりしうエサを

つげももるよ合ねが
 酒飲帳あらばこそ
 船度深よ出る

山三三三
 込ちりえぬ
 船のまき

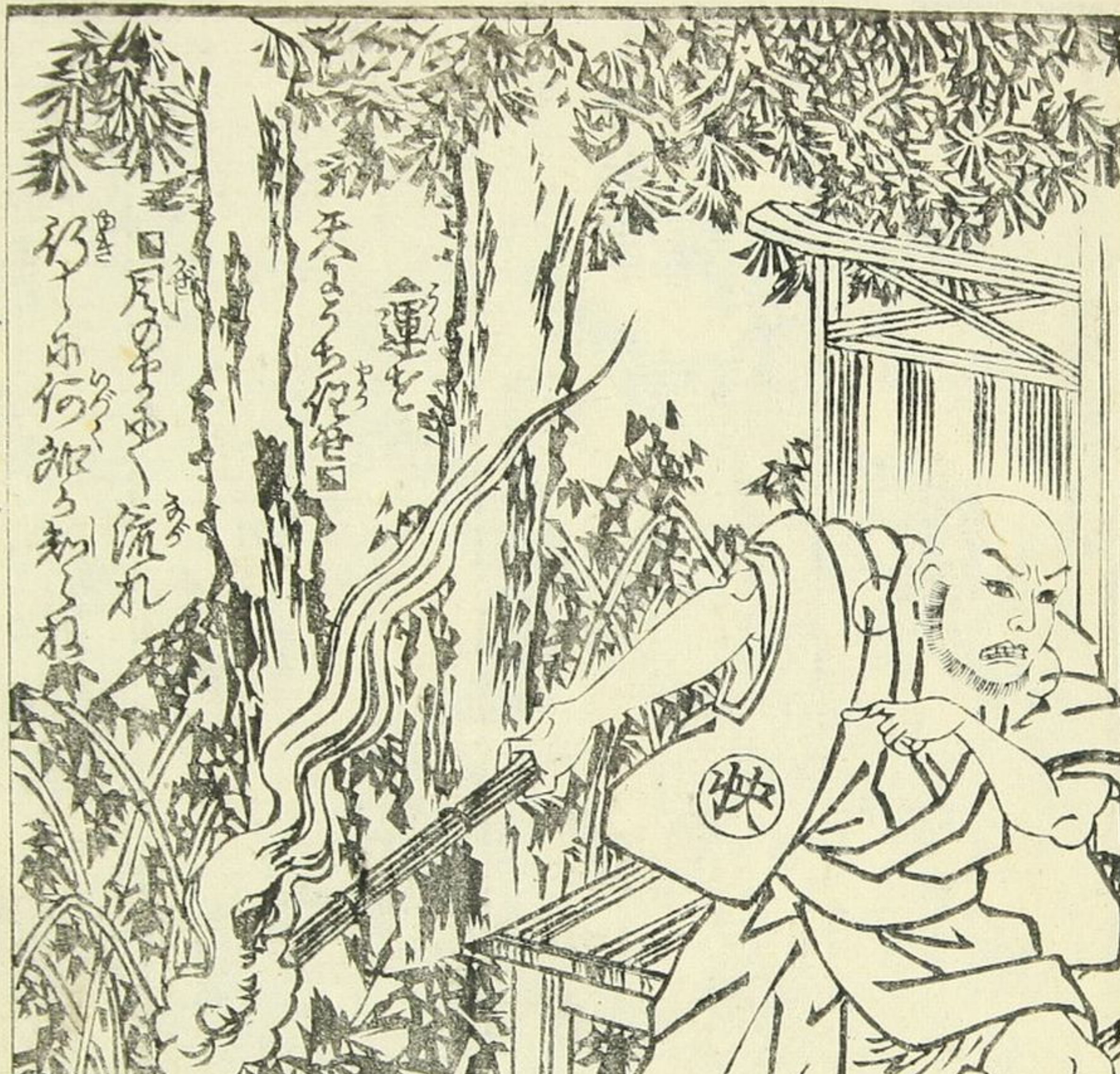


あへこの舟よ
 目のつらさを
 うち忘れ
 中ましく沖へ
 船を出せし夜の馬作
 大の舟よこの舟
 ころ俄に海上
 みる海り
 波の
 ぶつ

山三三
 大いよおらるる
 飛懸風をまらり
 大いよおらるる
 飛懸風をまらり
 大いよおらるる
 飛懸風をまらり

つれづれと方とをばあ船をせよとえよのせよ
 浪船まき浪のたぬゆり上られぬ浪
 るサツと浪雨のたぬゆり上られぬ浪
 る浪のこをせよ命おたると傷
 らけ共船のたぬゆり上られぬ浪
 左り人たよひ空くら
 けね方角を失ひ
 鬼角あまらぬ
 風和らぬ浪も
 のさつらとせよ
 なまらぬ人
 とせよ

初めよ記す
 編の
 第二
 解の
 繪の
 所の
 此の



下息つきをせよ
 船の内より別子宿の
 酒をのむ飯を食
 せんご内肉よりとら
 人の酒を探せよと

山三希
 さつら
 あまらぬ
 うる船を辛
 産人引
 あげら
 姓をホッ

天よりあまらぬ
 月のちやゆ流れ
 乃ゆ何知れぬ

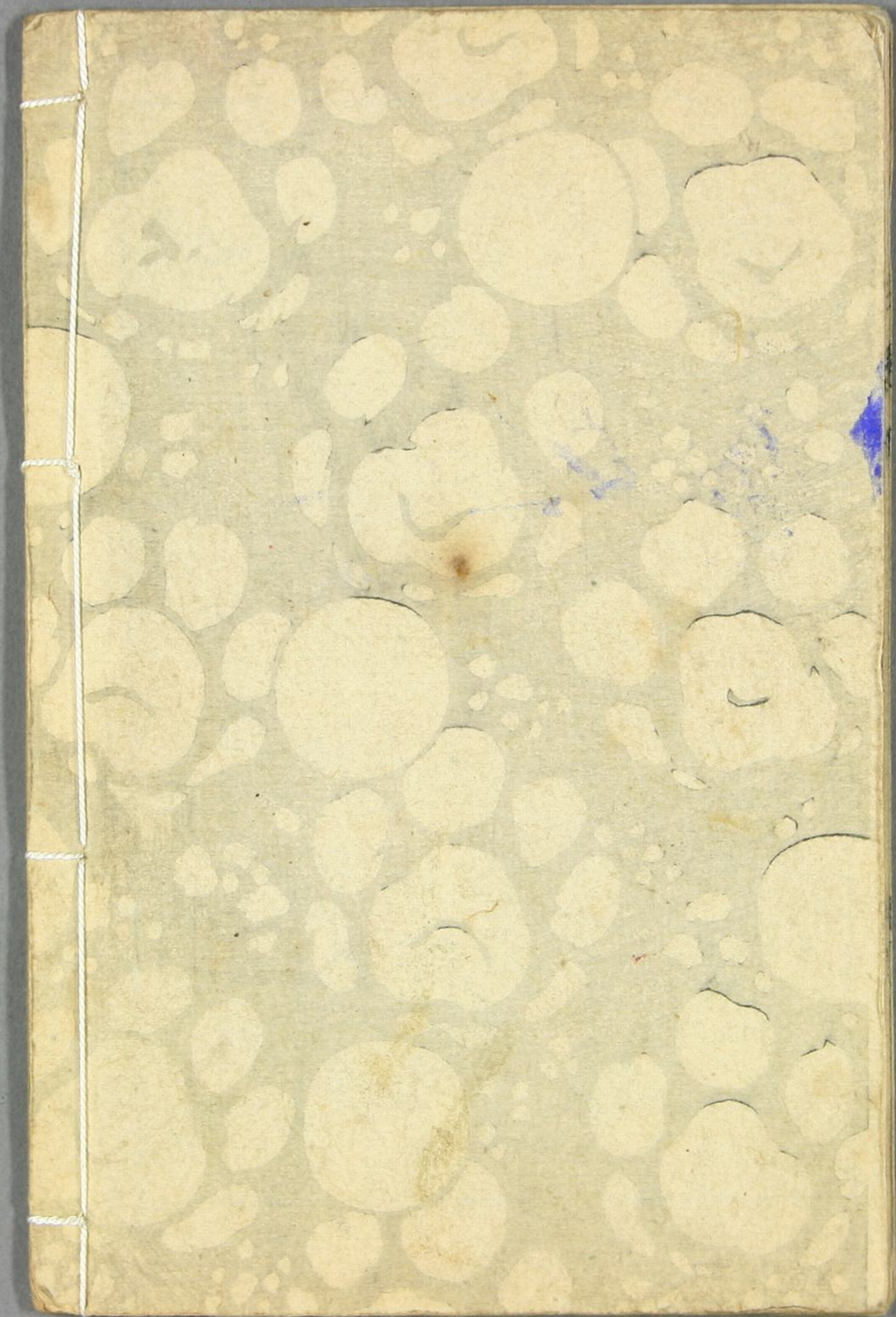


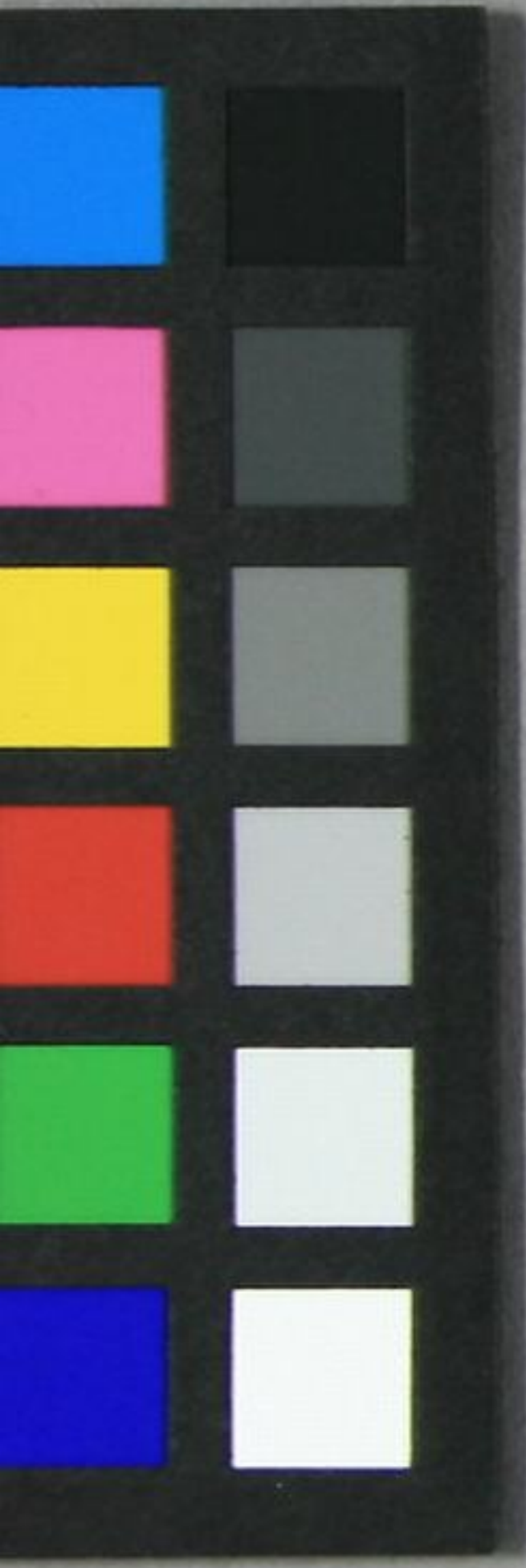
記者 篠田仙果
 画者 生田芳春

神田區仲町壹丁目六番地
 編集者 篠田久次郎

浅草區吉野町六拾五番地
 出版人 山村金三郎

明治十二年五月 日御届





霞月花三枝新話

篠田仙果録
生田芳春画

山松堂壽梓

初輯

